ほんものの本と出会うために

ほんものの本の中には、たくさんのものが詰まっています。

ほんものの本は、知識や理解を与えてくれるだけでなく、夢や、冒険や、驚きや、発見や、謎解きの楽しさや、感動や・・とてもここには並べきれないほどの、数々の贈り物を私たちに与えてくれます。ほんものの本は、たとえ手のひらに乗るほど小さくても、一つの世界を、一つの宇宙を持っています。

数え切れないほどの本の中から、ほんものの本をみつけてほしい。一人でも多くの人に、しあわせな出会いをしてほしい。そう願いながら、みんなで知恵を出し合い、58 冊の本をお薦めすることになりました。

ここにあるのは、58 の世界です。そして、本の表紙、つまりその世界に通じる扉を開ければ、あなたはそのまま別世界に旅立てるのです。そう、まるで「どこでもドア」のように。

それでは、あなたの手で開かれるのを待っている扉たちをご紹介しましょう。

新潟県立大学生活協同組合
教職員フォーラム

どこでもドアのかぎ 2013　目次

堀江薫　（国際地域学部 国際地域学科）..... 3
福嶋秩子　（国際地域学部 国際地域学科）..... 3
小谷一明　（国際地域学部 国際地域学科）..... 4
高端正幸　（国際地域学部 国際地域学科）..... 5
板垣俊一　（国際地域学部 国際地域学科）..... 6
福本圭介　（国際地域学部 国際地域学科）..... 8
宮西邦夫　（人間生活学部 健康栄養学科）..... 11
石川伊織　（国際地域学部 国際地域学科）..... 12
山田佳子　（国際地域学部 国際地域学科）..... 14
大桃伸一　（人間生活学部 子ども学科）..... 15
太田正之　（国際地域学部 国際地域学科）..... 16
太田優子　（人間生活学部 健康栄養学科）..... 17
荒木和華子　（国際地域学部 国際地域学科）..... 20
村松芳多子　（人間生活学部健康栄養学科）..... 21
石井玲子　（人間生活学部 子ども学科）..... 23
小澤薫　（人間生活学部 子ども学科）..... 24
黒田俊郎　（国際地域学部 国際地域学科）..... 24

特集「旅の本」

小谷一明　（国際地域学部 国際地域学科）..... 26
藤本直生　（SALC メンター）..... 27
福本圭介　（国際地域学部 国際地域学科）..... 28
山中知彦　（国際地域学部 国際地域学科）..... 29
宮西邦夫　（人間生活学部 健康栄養学科）..... 30
石川伊織　（国際地域学部 国際地域学科）..... 31
山田佳子　（国際地域学部 国際地域学科）..... 35
太田正之　（国際地域学部 国際地域学科）..... 36
大桃伸一　（人間生活学部 子ども学科）..... 37
荒木和華子　（国際地域学部 国際地域学科）..... 38
石井玲子　（人間生活学部 子ども学科）..... 39
黒田俊郎　（国際地域学部 国際地域学科）..... 40
水上則子　（国際地域学部 国際地域学科）..... 40
澁谷義彦　（国際地域学部 国際地域学科）..... 41

⌘　国際地域学部　国際地域学科　**堀江　薫**　⌘

わが青春に悔いあり

遠藤周作　角川文庫（１９７４年）

青春時代を笑い飛ばしながら書かれた本です（もしかすると絶版かもしれません）。エッセイ集としてシリーズ化された「狐狸庵閑話」に「こりゃあかんわ」とルビが付されているように、世の中なかなか思い通りにはいかないことを追体験できます。親友の北杜夫のエッセイ集の「どくとるマンボウ」シリーズなども合わせ読むと、時には自分の心の闇と向かい合い、時には前を向いて明るく頑張る姿に励まされるかもしれません。

⌘　国際地域学部　国際地域学科　**福嶋　秩子**　⌘

日本人のための日本語文法入門

原沢伊都夫　講談社現代新書（2012 年）

日本語は論理的でないといわれることがあるが、日本語には日本語の論理に基づく文法がある。本書では、学校文法とは異なる、言語学にもとづく日本語文法の基礎が解説されている。日本語を学ぶ外国人のために書かれた文法は、日本人にとっても目からうろこの体系性を明らかにしてくれる。

⌘　国際地域学部　国際地域学科　**小谷　一明**　⌘

母をお願い

申京淑（安宇植訳）　集英社文庫 2011

昨年、一番衝撃を受けた作品が、県大の講演会に来て下さった申京淑（シンギョンスク）さんのこの本だ。世界で読まれる作家のすごさか、ふとした時に脳裏をよぎる情景が、これでもかというくらい刻み込まれた（原文ならさらに違っているはずだ）。寂れた工場、山間の母の家など、ささいな描写がフラッシュバックのように時間が経っても蘇る。細部にまで心血を注いで書かれた本なのだろう。講演会は忙しいから行けないなと思っていたが、本を読んでしまうとたまらなく作者に会いたくなった。学生、先生方の助けを借りてサインまでもらえて本当にうれしかった。本学図書館所蔵

オンドル夜話ー現代両班考

尹学準　中公新書 1983

朝鮮文化の面白さをじっくり味わった。この本の味わいは、作者尹学準（ユンハクジュン）の語りの質にある。内容においても族譜、祭礼、女性の姓名、共産主義と両班の関係など、これまでよく知らなかったことばかり。例えば族譜については、1930 年代のソウル近郊を描いた梶山季之（かじやまとしゆき）の「族譜」（岩波現代文庫『族譜・李朝残影 』所収）で学んだつもりでいた。しかし族譜における女性たちの扱いに関する尹学準の説明は、梶山が描けなかった側面に光をあてている。また、大邱や慶州で育った森崎和江のエッセイ「土塀」（集英社『帝国日本と朝鮮・樺太（コレクション 戦争×文学）』所収）に出てくる結婚後も女性の姓が変わらない点についての議論においても、考え直すきっかけを与えてくれた。本学図書館所蔵

モモ

ミヒャエル・エンデ　岩波少年文庫 2005

最初の数ページでとりこになった。テーマは時間。本作には夢見ること、遊ぶ喜びを壊していく「時間どろぼう」、いわゆる灰色の男が登場する。「そんなことは役に立たない」、「それは時間の無駄だ」と言う者たちのせいで、私も灰色になりかけた。そんな時、カメとゆうゆう闊歩し、＜物語＞時間の花を咲かせていくモモが助けに現れる。なぜ読まずにいたのか、という本に出遭うことはめったにない。これまでたくさんの人からこの本を薦められた。もっと早くに読んでおけばよかったと思う。本学図書館所蔵（「岩波少年少女の本」版）

⌘　国際地域学部　国際地域学科　**高端 正幸**　⌘

日本辺境論

内田樹　新潮新書（新潮社）

「ご存じのように、『日本文化論』は大量に書かれています。世界的に見ても、自国文化論の類がこれほど大量に書かれ、読まれている国は例外的でしょう。（中略）その理由は実は簡単なんです。私たちはどれほどすぐれた日本文化論を読んでも、すぐに忘れて、次の日本文化論に飛びついてしまうからです。日本文化論が積層して、そのクオリティがしだいに高まってゆくということが起こらない。それは、日本についてほんとうの知は『どこかほかのところ』で作られていて、自分が日本について知っていることは『なんとなくおとっている』と思っているからです。」（p. 22）
、、、え？それってどういうこと？
（本学図書館所蔵）

⌘　国際地域学部　国際地域学科　**板垣　俊一**　⌘

完本八犬伝の世界

高田衛　ちくま学芸文庫、2005

前世紀の末から大学の「国文学科」は瞬く間に消滅していった。小生はその国文学専攻である。明治の新しい文学は坪内逍遙の曲亭馬琴批判から始まった。などど言っても今の多くの学生には何のことか分からないかも知れない。曲亭馬琴は『南総里見八犬伝』を書いた江戸時代末の文学者である。約して『八犬伝』はその後も漫画などさまざまに形を変えて親しまれた物語である。その魅力が実はだれも知らない意外と深いところにあった。それを見事に論じたのが本書。著者の高田衛という人は、国文学専攻だった紹介者の指導教官である。高田先生（私にとっては先生）は病気がちなこともあって、よく和服の袴姿で大学に着ていた。しかも薄い毛の頭に横の髪を束ねて挙げていたからそれが「まげ」のようにも見えて、なんだか江戸時代のサムライのようなユニークな格好だったのを覚えている。この本を私は 30 年前に読んでいるのだが、最近、『文藝春秋』2012 年 11 月号「六十歳になったら読み返したい 41 冊」に本書が採り上げられていた。本書はもと中公新書の 1 冊として出された本である。最近の中公新書はどうも読みたいと思う本が少ないように思う。本書を採り上げた『文藝春秋』の紹介者もまた曰く、中公新書も「かつては何とレベルが高かったことか」と。本書は、大学生の今読んでおけば、諸君が六十歳になったとき、再度読み返すことで感銘を得ることができるに違いない本として推薦したい。

江戸期視覚文化の創造と歴史的展開

―覗き眼鏡とのぞきからくり―

板垣俊一　三弥井書店、2012

さて、ついでながらその大先生の不肖の弟子が出した最近の本も自薦しておきたい。良書を紹介するこの企画のなかで、自著を採り上げるのも少し気が引けるが、最初で最後のこととしてあえて次の図書を紹介したい。

旧新潟県西蒲原郡巻町（現新潟市西蒲区）に「のぞきからくり」の屋台が残されているのを知っているだろうか。昭和の三〇年代ごろまで各地のお祭りに持ち出されて子どもたちから大人まで、興味津々にレンズの付いた穴から中の絵を覗いた、花形の見世物屋台だったのだが、今ではひっそりと資料館に保存されている。昔は全国にあったことが知られているが、日本で唯一動かすことができる屋台はこの巻郷土博物館にあるものだけという貴重な文化財である。こんなもの研究して何が面白いって？それが、なんと大袈裟に言えば、江戸時代以来の日本人に“外界の見方を教えた”精神史上の画期的な出来事と関係しているものだから面白い。

本書は何かを「覗く」ことに興味を示すという人間の本能をくすぐるこの装置が、どんなふうにして出来上がったのか、そしてそれはどんな文化的・精神史的な変化を日本人にもたらしたのかということを、類似の装置であった「覗き眼鏡」とも合わせて、とても興味深く考察した本である。――いささか身贔屓ではあるが、読んでもらえると嬉しいという思いをこめてここに紹介したい。

⌘　国際地域学部　国際地域学科　**福本　圭介**　⌘

原発と憲法９条

小出裕章　遊絲社

2011 年 3 月 11 日の東日本大震災のなかで起こった原発事故は、私を根底から打ちのめしました。ただただ私は狼狽し、途方にくれたのです。そのようなとき、私はこの本の著者小出裕章さんの存在をあらためて知りました。同僚の先生に見せてもらった DVD のなかの彼の言葉を食い入るように聞いていたことを今でもはっきり覚えています。小出さんは、反原発の立場を明確に打ち出しながら京都大学原子炉実験所で働く科学者です。世界がこんなふうになっても、思想が込められた言葉というものがまた可能なのだと驚きました。私は、彼の本をむさぼり読み、インターネットでは彼が出演するラジオ番組に耳を傾けました。現在ほど「専門家」や「学者」が信頼をなくした時代はないかもしれません。しかし、彼の言葉には道理があり、思想の深さがあり、したがって説得力がありました。例えば、この小さな本を読めば、彼が原発に反対する理由がよくわかります。確かに原発はとてつもなく危険なものです。しかし、そんなことよりも、彼が原発に反対するのは、それが「差別」のうえに成り立っているからなのです。自分のためなら誰かに危険を押しつけてよいという社会。それをどう考えるのか。この本は、講演録なので難しくありません。ぜひ手にとって欲しいです。原子力に反対することがなぜ戦争放棄とつながるのか、そのことについても考えさせてくれます。自分の頭でものを考え、私たち自身の「魂」を蘇らせましょう。

海はひとの母である―沖縄金武湾から

安里清信　晶文社

今、沖縄について考えることは、実は、とても深いところで、私たち自身について考えることだと思います。今、沖縄について考えないことは、とても深いところで、私たち自身をないがしろにすることだと思います。他者の魂を傷つけるということは、自分の魂を傷つけることであり、その二つに無感覚になってしまうと、そこから植民地主義が始まります。本当の意味で「生きる」ということは、そういったものと闘うということなのではないかとこの本は気づかせてくれます。

この本の著者である沖縄出身の安里清信さんは、植民地朝鮮で学校の教員をしました。中国では日本兵として壮絶な戦争体験をし、沖縄戦では妻子を失いました。いわゆる「自決」でした。戦後、安里清信さんが沖縄に帰ってきたら、そこはなにもない焼け野原であり、被害と加害のからまるどん底に直面したのです。そして、その安里清信さんが、自分自身のいのちの生き直しをかけて闘った闘いが沖縄金武湾におけるCTS闘争でした（詳しくは、本書を！）。沖縄の「戦後」は米軍による支配から始まりましたが、日本に「復帰」した後も日米両政府による支配は現在に至るまで続いています。軍事的、経済的、精神的な支配がある場所。そのような場所で、「生きる」ということは何を意味するでしょうか。そして、本当の意味で「生きる」ことはいかにして可能でしょうか。安里清信さんは沖縄の自然を守りながらそのことを深く問い続けました。そして、沖縄の人々は、この問いを現在も強烈に問い続けています。この本はもう図書館や古本屋でしか手にできません。しかし、ぜひ多くの人に読んで欲しい本です。なぜなら今、本当に問われているのは、私たち自身の「生き直し」だからです。

真の独立への道（ヒンド・スワラージ）

M. K. ガーンディー（田中敏雄訳）　岩波文庫

　実は、私はいまガンディーの本が読みたくて、読みたくてしかたありません。もしたっぷりと時間があるのなら、彼の言葉の森にどこまでも深く分けいっていきたい。そして、その真ん中で、じっくりと対話がしたい。ガンディーは、20世紀の初頭にヨーロッパの近代文明をさして、「この文明は不道徳である」と断言しました。日本では、多くの知識人がヨーロッパ文明に憧れ、富国強兵に邁進していた時代です。しかし、ガンディーは、それとは違う未来を、大英帝国による植民地支配のただ中で考えていました。そして、人々の「魂」を犠牲にするのではなく、人々の「魂」そのものが主人公となるような闘いをサンダルと腰巻ひとつで始めるのです。しかし、皆さんご存じのように、ガンディーの夢は破れました。第二次世界大戦後インドは独立しましたが、それはガンディーの思い描いていた未来とは程遠いものでした。さて、「暴力」にまみれたこの世界で、私たちはここからどこへ向かうべきでしょうか。しかし、そのように考えるとき、私はまたガンディーの姿を思い浮かべてしまうのです。子どもみたいですね。彼が見た「夢」をなかなか忘れることができないのです。ガンディーの本はたくさんありますが、まずは小さなこの本をおすすめします。けっして簡単ではありませんが、不思議な魅力をたたえた本です。ダグラス・ラミスの『ガンジーの危険な平和憲法案』（集英社新書）がすぐれたガイドブックになってくれると思います。それと、機会があったら、Mr. Childrenの「hypnosis」という曲を聞いてみてください。「夢」を選んでもいいかな、と思わせてくれます。（本学図書館所蔵）

⌘　人間生活学部　健康栄養学科　**宮西　邦夫**　⌘

WHO をゆく　感染症との闘いを超えて

尾身　茂　医学書院

WHO アジア地域における小児麻痺（ポリオ）根絶の立役者である。
21 世紀最初の公衆衛生の危機であった SARS 対策でも陣頭指揮をとり、日本に戻ってきてからは新型インフルエンザ対策で活躍した。是非、グローバルな視野を身につける機会として読んで欲しい。

Anticancer: A New Way of Life

David Servan-Schereiber, MD, PhD　VIKING

熟読するには時間が掛かりましたが、がん治療、がん予防の現状と課題について考える機会になると思います。

102 歳のロビンソン・クルーソー

渡久地政瀧　マキノ出版

南の島の片隅で自給自足のひとり暮らし、碧海のスローライフ・・・
「テーゲーにしていればナンクルナイサー」、なにしろひとりはのんきです。自分が食べたい物を、好きに作って食べられるし、その日やりたいと思うことを自由にやれる・・・同感できるまで耽読して下さい。

⌘　国際地域学部　国際地域学科　**石川　伊織**　⌘

化粧男子　男と女、人生を 2 倍楽しむ方法

井上魅夜　太田出版

文字通り、お化粧している男子についての本です。お化粧は女性がするものと思っているあなた！　それは大きな誤解です。全人類史を通して、男性が化粧をしていないのは、19 世紀初頭以降のヨーロッパとそれを真似した文明圏のみのことです。明治天皇でさえ、明治に入って鉄道が開通し、太陽暦に改暦され、洋装が宮中に取り入れられるまで、ちゃんとお化粧をしてました。明治 5 年 9 月（太陽暦では 10 月 14 日）の新橋＝横浜間の鉄道開通式には、ちゃんと鉄漿をして化粧をし、衣冠束帯で出御しているのです。だから、常識は捨てないといけません。とはいえ、この井上さん、お化粧してない時としている時の落差がすごくて、もう、びっくりです。まあ、彼の体験をお読みあれ。

股間若衆　男の裸は芸術か

木下直之　新潮社

女性の裸体を描いた美術作品は「芸術」として通用しています。では、男性の裸は？この問題に正面から向き合った芸術理論の本です。もちろん、「股間若衆」は「古今和歌集」のもじり。章のタイトルも、第一章「股間若衆」、第二章「新股間若衆」、第三章「股間漏洩集」、付録が「股間巡礼」。リアリズムを追及するとそのものずばりで描かざるを得ない男性器ですが、そうしてしまうと刑法に引っかかってしまう。そこで、なんとなくぼかされるのです。単にモッコリしているだけの塊とか。こうした現象は、主に彫刻家や画家になったのが男性だったからという理由だけでは説明がつかない、と著者は言います。そこで、幕末以来の日本の近現代史との関係で、芸術表現に関わる性的な規制やジェンダーバイアスを分析することになるのでした。ところで、「芸術」とは何なのでしょうか？　女性の裸体像が「芸術」として通用しているという事態は、著者の分析からすれば、これとても、到底「あたりまえ」のこととは言えないけです。

そうなると、そもそも「芸術とは何か」「なぜリアリズムが芸術たりうるのか」が問われなくてはなりません。ついでに言うと、「芸術」が「宗教」や「社交」から区別される独自の価値を持っている、と考えられるようになるのは、19 世紀の始めであり、ちょうど欧米列強が首都に博物館を建設して、植民地から収奪してきた「芸術作品」を展示するようになる時期と重なっているのです。考えるべき多くの問題がここにはありそうです。

＜通訳＞たちの幕末維新

木村直樹　吉川弘文館

幕末から明治維新にかけての時代は、尊皇攘夷が叫ばれる時代から近代化へ向かう時代への転換点にあるわけですが、その裏では当然、外国との交渉にあたる役人が必要になる時代でもありました。尊皇攘夷を実行するには、外国に宣戦布告をしなくてはならないわけで、そのためにも外国語ができる人間が必要になります。当然、近代化にもそうした人材が必要となります。しかも、江戸時代にはヨーロッパ諸国の中で通商が許されていたのはオランダだけでしたから、オランダ通詞が必要であったわけですが、この時代、オランダ以外の国々とも意志疎通をする必要に迫られ、英語通詞の需要が高まってきます。しかし、そうそう簡単に外国語を習得できるわけではないし、しかも、世襲ではうまくいくわけもありません。また、見落とされていたのは、同時に存在していた中国通詞で、英米露等の外交官との意志疎通がうまくいかない場合には、間に中国語の通詞を入れて、それをさらに日本語に訳す、といったことまで行われていました。歴史の影に隠れていた幕末の下級役人である「通詞」の実態を調べ上げた貴重な本です。外国語を学ぶというのがどういうことなのか、外国語を「道具として」使うというのはどういうことなのかを考える、一助になるでしょう。もっとも、私には、「外国語は道具だ」などと考える人は信用できない御仁としか映らないのですがね。

⌘　国際地域学部　国際地域学科　**山田 佳子**　⌘

聴衆の誕生ーポスト・モダン時代の音楽文化

渡辺裕　中公文庫

私は村上春樹が嫌いではないのですが、『小澤征爾さんと、音楽について話をする』（昨年のこの冊子でも紹介されました）の中で、巨匠と言われる小澤征爾を相手に堂々とクラシック音楽の知識を披露する様子に、「よくもまあ」と思うと同時に、それを黙って聞き入れる小澤征爾の懐の深さに感心したりもしました。そんな私のすっきりしない気持ちを解消してくれたのが、そのあと偶然読むことになった本書『聴衆の誕生』です。

クラシック音楽と聞いて私たちがふつう思い浮かべる「静まりかえった観客席で古典的な名曲に一心に聴き入る聴衆たち」というイメージは産業革命後に形成されたものにすぎず、それまでのコンサート会場はわいわいがやがやだったという話に始まり、「聴衆」をキーワードに現在までのクラシック音楽の受容の変遷をたどるうちに見えてきたのは、音楽にとどまらない、現代文化の様相でした。そして「プロ」と「アマ」の境界について改めて考え込むことにもなってしまいました。

「声」の資本主義

ー電話・ラジオ・蓄音機の社会史

吉見俊哉　河出文庫

『聴衆の誕生』のあと、偶然読むことになった本書は「声」をキーワードに電話やラジオ、レコードがいかにして誕生し、どのような役割を担ってきたかを説いています。電話がそもそも何のために使われていたかという話からは、やはり単なる伝達手段を超えた、文化全般の姿が見えてきます。テクノロジーの話ではなく、あくまで人間を主体に据えた見方なので、私のような機械音痴も「機械に使われている」と受身の姿勢で無責任に嘆いてばかりはいられないようです。こんなものがあったら、という「欲望」がなくなれば人間おしまいなのですから。

⌘　人間生活学部　子ども学科　**大桃　伸一**　⌘

夜回り先生

水谷修　サンクチュアリ出版

子どもたちはみんな「花の種」、どんな花の種でも、植えた人間がきちんと育てれば必ず花を咲かせる、という信念のもとに、夜の街を回り、不登校、リストカット、薬物乱用などの子どもと向き合ってきた水谷修さんの体験を綴った作品。

⌘　国際地域学部　国際地域学科　**太田 正之**　⌘

日本を，信じる

瀬戸内寂聴　ドナルド・キーン　中央公論新社

昨年９０歳を迎えられたお二人の対談集です．４０年近くアメリカと日本を行き来されていたキーン先生は東日本大震災後，住み慣れたニューヨークの住居を引き払い，日本永住を決意され日本国籍を取得されたことは記憶に新しい．対談相手の寂聴さんとの共通点が意外にも多いことに驚かされました．東北地方との結びつき，三島由紀夫との交流などです．このようなことが次々と語られていきます．「日本は必ず立ち直る．私はそう信じています．」というキーン先生のことばで締めくくられています．

今秋，中越沖地震後の文化活動（人形浄瑠璃の復活）の縁で柏崎市にドナルド・キーン・センター柏崎がオープンします．先生がお住まいになっていたニューヨークのアパートも再現されるそうです．蔵書の大半もセンターに所蔵予定と聞きます．オープンを心待ちにしています．

発見の興奮--言語学との出会い--

中島平三　大修館書店

「つぶしがきく学部へ」との助言を受け経済学部（より正確には法経学部）に入学した学生が，どうして日本を代表する言語学者となったのか．そこには言語学との出会い，本との出会い，そして人との出会いがあった．ことばの不思議，言語学のおもしろさ・楽しさを味わうには一押しの本です．

⌘　人間生活学部　健康栄養学科　**太田 優子**　⌘

あなたは、どのような時に本を手に取りますか？本学初めての卒業式を目の前に、1期生の卒業をお祝いし、公私ともに多くのことがあった 4 年間を振り返り、過去と現在そして未来に思いを馳せながら、手にしてきた本の中から 3 冊をご紹介いたします。

〔1 冊目：過去に何度も手に取ってきた本の中から〕

小川未明童話集

小川　未明　新潮文庫

幼い頃の記憶をたどると、繰り返し読み印象に残った最初の日本の絵本が『赤いろうそくと人魚』でした。この作品をはじめとして、新潟県高田（現上越市）出身の童話作家、小川未明｛正しくは「びめい」とのこと…1882（明治 15）年～1961（昭和 36）年｝の手になる 25 編の短編が収載されています。

教科書にも掲載された『野ばら』(各々の国境に配置された老兵士と若い兵士の物語)や、『金の輪』(死を正面から取りあげた、ひとりぼっちの少年の物語)、その他にも『雪くる前の高原の話』や『遠くで鳴る雷』『島の暮れ方の話』など、タイトルを目にしただけで、想像の世界へ飛び立つことができそうです。

新潮文庫のラインアップがお勧めですが、その他に手に取りやすい文庫本が岩波文庫（本学図書館所蔵)、春陽堂文庫、講談社文庫から出版されています。

この機会に、童心に帰りながら、本県出身の作家による美しい日本語を味わってみませんか。

〔2 冊目：現在、手に取ることの多い本の中から〕

生きるのが楽しくなる 15 の習慣

日野原重明　講談社プラスアルファ文庫

「生活習慣病」という行政用語を早くから提唱され、予防医学や終末期医療の重要性を説かれてきた、現役の内科医でいらっしゃる日野原　重明先生｛1911（明治 44）年～｝の著書を初めて手にしたのは 1985 年、『老いを創める』という書籍から、「はじめる」には色々な意味があることを実感し、もう四半世紀近く経ちます。ご講演も 2 回拝聴し、ウィリアム・オスラー博士を紹介され「新老人の会」を結成される一方、レオ・ブスカーリア作の絵本『葉っぱのフレディ～いのちの旅～』のミュージカル化に携わられてきた、多才な佇まいからも、今まで多くの刺激をいただいてきました。
『生きかた上手』（2001 年）『たった一度の人生だから』（星野　富弘氏との対談：2006 年）など、読みやすい多くの著書の中から、新たな巣立ちの時を迎える 1 期生の皆さんや就職活動中の皆さんには、とくに本書をお勧めします。
習慣 1； 愛することを心の習慣にする，習慣 2 ；「良くなろう」と思う心を持つ，習慣 3； 新しいことにチャレンジする，習慣 4； 集中力を鍛える，習慣 5 ；目標となる人に学ぶ，習慣 6； 人の気持ちを感じる，習慣 7； 出会いを大切にする，…その後に続く習慣 15 までを楽しみに、本書を開いてみてはいかがでしょう。
まずは一読し、納得のうえ習慣化したいことを選び、できることから始めてみませんか。
（『生きるのが楽しくなる 15 の習慣』『老いを創める』単行本：本学図書館所蔵）

〔3 冊目：未来に向けて何度も手に取りたい本の中から〕

あのひのこと――Remember March 11.2011

葉　祥明　佼成出版社

　あの東日本大震災をいかに語り継いでゆくのか、何を伝えてゆくのか、一人ひとりの思いをどのように汲み取ってゆくのか、あなたなら私なら、どう考え行動するでしょうか。
本書は、絵本作家（郵政省ふみの日記念切手のメインキャラクター“JAKE”の作者）で、詩人（『母親というものは』：リリー・フランキー著『東京タワー　～オカンとボクと、時々、オトン～』の中で引用）である、葉　祥明氏｛1946（昭和 21）年～｝が手がけた、東日本大震災に遭遇した少年の物語、6 歳から読むことができる絵本（英訳付き）です。
　How can we overcome such hardship and sadness and continue to live ?（著者あとがき）～編集者と何度も議論を重ねながら構想をまとめ 2012 年 3 月に出版された、その日は、大震災時には既に病床にあった私の父が永眠する 2 週間前であり、作中の少年と我が息子、そして少年の祖父と父を重ね合わせながら読み、やさしいタッチの中に、何かに包まれたような温かな希望を感じとることができました。たくさんの方々に向けて、わかりやすく、やさしく希望を伝えることも必要な時だからこそ、あなたにも、本書を手に取り、何かを感じて、何かしら次の行動に繋げてもらうことができれば、嬉しく思います。
いまアンネの薔薇が咲く、北鎌倉の葉祥明美術館にも、いつか足を伸ばしてみましょう。
なお、著者の主な本学図書館所蔵作品には、『地雷ではなく花をください』（英訳付き）、『日本の名詩を読みかえす』（表紙カバーと三好達治・立原道造・高見順の各々の詩の絵；高橋　順子氏の手になる 14 詩人の現代詩の解説もお勧め！）があります。手に取ってみて、ゆっくり味わってみませんか。

⌘　国際地域学部　国際地域学科　**荒木　和華子**　⌘

ダロウェイ夫人

ヴァージニア・ウルフ（丹治愛訳）　集英社文庫

この本の魅力や文学的価値の高さは様々な形で表現されつくされているので、私に足せるものはないのですが、読んでいて何十回と眩暈がして、文字を必死においました。また、文学作品ですがジェンダー×階級×歴史を考える資料としても貴重だと思います。この本と一緒におすすめしたいのは、映画「めぐりあう時間たち」（Hours）の観賞です。映画には、ニコール・キッドマン演じるヴァージニア・ウルフと、その愛読者、そして現代のダロウェイ夫人が出てきます。実はこの映画は私の一番好きな作品なのですが、初めて観た後はしばらく一人になって自身を構成しているものを取り出して眺めてみること・・・文字通り「脱構築」を試みることができました。観た後の自分は、もう元の自分ではない、そのような体験ができる作品かもしれません。

⌘　人間生活学部　健康栄養学科　**村松 芳多子**　⌘

「浜村渚の計算ノート」シリーズ

青柳碧人　講談社文庫

数学で答えられないものはないのか・・・世の中は数学で出来ているのかもしれない。最近、音楽も数学で出来ていると話も聞こえてくる。文系人間には敬遠されがちな数学です。この本を読むと数学嫌いが好きになるかもしれません。そして、もう一度数学を勉強しようと思えるようになれる本です。パズル感覚で数学と向き合える本です。中学・高校の数学教科書が「浜村渚の計算ノート」だったら、誰もが数学で困らなかったと思います。

日本の学校教育から、数学がなくなったことから「黒い三角定規」という数学テロ組織が現れ、数学教育の向上を求め、政府に数学の難事件を起こします。それを解決していくのが、中学 2 年生の浜村渚です。彼女がキュートでかわいいです。数学史も学べます。

置かれた場所で咲きなさい

渡辺和子　幻冬舎

自分だけ不幸な人間だ。自分だけが恵まれていない。自分だけが・・・、自分だけが・・・と思っている方に是非読んでいただきたい本です。タイトルの由来は「Bloom where God has planted you.（神が植えたところで咲きなさい）」です。重責に思い悩んでいた時に、ひとりの宣教師が手渡してくれた短い英詩の一節です。本書の中で好きなフレーズがありました。「“あなたが大切だ”と誰かに言ってもらえるだけで、生きてゆける」、「価値観は言葉以上に、実行している人の姿によって伝えられる」

第 1 章　自分自身に語りかける　第 2 章　明日に向かって生きる　第 3 章　美しく老いる　第 4 章　愛するということ　を体験から綴っています。

グローバル・エシックスを考える

寺田俊郎・舟場保之　編著　梓出版社

この本は「まえがき」に記されているが、研究成果の一部を「9.11 後の世界と倫理」テーマでまとめた書籍である。人は、教育と教養を身につけてもなお、感情に支配され報復戦争を行う。歴代の哲学者らがさまざまな形で学問とは何かを探求発展させ、より優れた知識と教養が身についたはずなのに・・・『永遠の平和のために』の著者でもあるカント、その哲学研究者（ヘーゲル哲学、法哲学、歴史学、ジェンダー論、批判理論、教育学など）を中心に、彼らの考え方やとらえ方をまとめた議論集である。受けとめ方・評価は読者次第です。

学問を学ぶということをもう一度考えてみましょう。社会の中で、討論しあうこと・意見の違相違などを互いに切磋琢磨することも重要である。個性あふれる研究者の考えるグローバル・エシックスを読みながら、これからの人生に生かしてほしいと思う。

採用基準

伊賀泰代　ダイヤモンド社

マッキンゼーの採用マネジャーを 12 年間務めた著者が、「採用基準」でもっとも大切なものについて記した書籍です。本書から、マッキンゼーが求める人材は、リーダーシップがあること（次いで地頭がいいこと、英語ができること、日本語（母国語）ができること）であるようです。日本とアメリカの「リーダーシップ」、「グローバルな人材」、「優秀な人材」という言葉の違いがはっきりとわかります。日本の組織では、リーダーシップをとれる環境ではないことがよくわかります（通常の組織図）。アメリカでは仕事の中で自分が仕事の真ん中にいます（放射状の組織図）。その中でリーダーシップを養っていきます。真のリーダーシップとは何かを考えてみましょう。これからの世界を生き抜く人たちのパスポートとなるものかもしれません。これからの会社で、または大学で自分が学ぶべきことは何かを見直す良いきっかけなります。

⌘　人間生活学部　子ども学科　**石井　玲子**　⌘

直観力

羽生善治　PHP 研究所

私はこれまで何かを選択する際、深く考えずに「直感」に従って生きてきたと思っていますが、いったい直感とは何なのでしょうか。著者の将棋棋士の羽生さんは「直感は、ほんの一瞬、一秒にも満たないような短い時間の中での取捨選択だとしても、なぜそれを選んでいるのか、きちんと説明ができるものだ。適当、やみくもに選んだものではなく、やはり自分自身が今まで築いてきたものの中から生まれてくるものだ。」と述べています。そう言われてみると、私の直感も後から理由をつけられる場合が多いようです。

また、「見切る」「何も考えない」「一つのことを考え続ける」「他力を活かす」「忘れる」「客観的に見る」「直感を信じる」ことが直観力を磨くためにも、生きていくためにも重要であるという著者の考えに私も同感です。皆さんも、これから何をしたらよいかと迷う時は、自分の直感力を磨いて、それを信じて、人生を楽しく充実したものにしていってください。

悩む力

姜尚中　集英社

2008 年のベストセラー。大学を卒業していく皆さんが、これからどのように悩みを乗り越えていくか、又は悩みながら生きていくか、のヒントを与えてくれる本です。生きることや死ぬことの意味、人生の意味、愛することの意味は何なのでしょうか？また、人間が生きていく上で「悩む」ことに何の意味があるのでしょうか？悩む人間は不幸なのでしょうか？著者は「悩む力」にこそ、生きる意味への意思が宿っているということを、文豪の夏目漱石と社会学者のマックス・ウェーバーを手がかりに考えています。

本書で著者は「若い人には大いに悩んでほしいと思います。そして、悩みつづけて、悩みの果てに突きぬけたら、横着になってほしい。そんな新しい破壊力がないと、いまの日本は変わらないし、未来も明るくない、と思うのです。」と言っています。皆さんも大いに悩んで、そして、生き抜いてください。（本学の収蔵図書）

⌘　人間生活学部　子ども学科　**小澤 薫**　⌘

「大量失業社会」の労働と家族生活

都留民子編著　大月書店

福岡県筑豊と大牟田という旧産炭地における労働者の生活を、住民 150 人のインタビューから明らかにしています。どう生きてきたか、どのようにいま生きているのかということみることができます。スクラップ化された炭鉱産業が大きく人々の生活に影響を与えている。そのなかで、失業対策事業で働いてきた 60 代の女性、正規で働き続けなければ生活できないといまの仕事にしがみつく 30 代の母親、親の年金によって生活が支えられている 40 代の求職者、生活保護の受給を拒否して働きづめで子どもを育てる 40 代の女性など、たくさんの姿があります。いまの状況、いまの思いに至る過程が、詳しく聞き取られ整理されています。ここから、今日の貧困の性格を明らかにし、貧困の根絶に向けた社会制度の構築を模索しています。労働と家族生活の関係を強く意識することができます。労働者としての抵抗についても触れています。

⌘　国際地域学部　国際地域学科　**黒田　俊郎**　⌘

遺体

石井光太　新潮社

先日観た映画『ニーチェの馬』（タル・ベーラ、ハンガリー2011）もそうだったが、稀に人間の尊厳をめぐって畏敬の念を抱かざるえないような作品に出会うことがある。３・１１を題材とした石井光太の『遺体』もまたそのような作品のひとつである。最近映画化されたが、私はとてもその映画を観る気にはなれなかった。それほどルポルタージュとして完璧である。人生の哀しみの大半は、忘却の海に沈めてしまったほうがいいと思ってきたが、それでもなお忘れてはいけないもののあることを本書は教えてくれる。

特集

旅の本

☸　国際地域学部　国際地域学科　小谷　一明　☸

平さんの天空の棚田
写真絵本・祝島のゆるがぬ暮らし　第 1 集

那須圭子　みずのわ出版 2012

2011 年 8 月 7 日、広島の原爆忌の翌日に祝島（いわいしま）へ船で渡った。2010 年に上映された 2 本の映画、『祝（ほうり）の島』（監督纐纈あや）と『ミツバチの羽音と地球の回転』（監督鎌仲ひとみ）の記憶をたよりに、仲間 3 人とこの瀬戸内海に浮かぶ山口県の小さな島を歩きまわった。本書の主人公、農家の平萬次さんの田んぼは島の裏側にある。私たちは小山に登り、巨大な石垣のある棚田へと向かった。祖父が造り始め、孫の萬次さんも手伝った巨石の壁に見とれながら田んぼわきで遊んでいると、二階の窓から平さんが声をかけてくれた。忘れがたい想い出である。写真集は「ひとり出版社」で知られるみずのわ出版から出された。神戸市長田区の湊川（みなとがわ）散策にうってつけの好著『湊川を、歩く』（登尾明彦、2001）など、瀬戸内海周辺地域に特化した本を多く出している。今年、2013 年の 3 月から瀬戸内国際芸術祭が始まるが、祝島の「天空の棚田」も再訪したい。

☸ SALC メンター 藤本　直生 ☸

フジモト先生のビューティフル★アメリカ
～Some Stories in Missouri～

藤本　直生　銀河書房

この本は、今から約 20 年前、1995 年に私が書いて自費出版した本です。当時の私は、長野県内の中学校で英語の教師をしていました。学生時代から英語を勉強し、いつか外国に行きたいという夢を持っていて、念願叶って初の海外旅行が、アメリカのミズーリ州だったのです。

２０日ほど、夏休みに長野県との姉妹州であるミズーリ州に、派遣団の一員として訪問する機会に恵まれ、ホームステイを中心としたプログラムだったため、地元の方との交流が多く持て、観光旅行とはひと味違った体験ができました。

帰国後、中学生向けに書いていた通信文がきっかけとなって、NHK「基礎英語」テキストにも、1993 年 5 月号から 11 月号まで 7 回にわたって「フジモト先生のワクワクアメリカ体験記」を連載しました。この本は、それをもとに書き下ろしたものです。

これから、アメリカへホームステイに行かれる方にお薦めしたい本です。また、後半には私の英語勉強法についても触れていますので、卒業後も引き続き英語を勉強して行く方にも、ぜひ読んでいただきたい 1 冊です。

学内には SALC に 1 冊ありますので、興味のある方は手にとってみて下さい。また、出版社が倒産したため、書店で手に入れることはできませんが、生協で販売しています。定価は 1,500 円ですが、生協では 1 割引きの 1,350 円で買えますので、ぜひ読んでみて下さい。

☸　国際地域学部　国際地域学科　福本　圭介　☸

堕落論／日本文化私観 他二十二篇

坂口安吾　岩波文庫

旅と言えば、いつも坂口安吾の本を思い出します。坂口安吾のエッセイは、大学生のときにたくさん読みました。そして、何度も勇気を得たことを覚えています。今もその記憶だけを頼りに書いていますが、「堕落論」というエッセイにはタイトルも含めて不思議な魅力がありました。すぐれたエッセイは、そこに書かれている文字通りの内容を読みながらも、同時に書かれていない文字も読めるのです（私たちは、本を読みながら、本当は何を読んでいるのでしょう？）。そのときに、私が考えたこと。旅に出るということは、出発することです。しかし、本当の出発は、目的地をもたない。なぜなら、それまで自分がもっていた目的地を捨てることこそが、本当の出発だから。手を放すということ、落ちるということ、それが出発である。皆さん、いつかどこかで行き詰まったときは、旅に出ればよいのだと思います。手を放すことは、けっしてわるいことではありません。落ちながら、発見できることがあるはずです。皆さん、本当によい旅を。（本学図書館所蔵）

☸　国際地域学部　国際地域学科　山中　知彦　☸

君たちにはまだそのような感覚は無いと思いますが、私くらいの年代になると、人生は人間・空間・時間を巡る旅そのものといった感覚です。そういう意味では、あらゆる書物は「旅の本」とも言えなくもありませんが、今回は東洋に係る「旅の本」を 2 冊紹介しましょう。

Unbeaten Tracks in Japan

Isabella L. Bird　[Kindle 版] Amazon 838 円

日本奥地紀行

イザベラ バード 高梨健吉訳　平凡社ライブラリー[文庫] 1,575 円

明治 11(1878)年に横浜から北海道まで旅した英国の女性旅行家 Isabella Bird は、妹に宛てた書簡集のかたちで当時の東日本の様子を詳細に記録しています。全体に辛口の筆で記述されていますが、7 月に 1 週間以上滞在した新潟町の様子は、他都市に比べ格段の町並みの美しさを Handsome, prosperous city と讃えています。さらに山形県置賜地方の田園風景に至っては、東洋のアルカディアと破格の評価を与えています。２０年くらい前に山形県小国町で地域づくりの仕事をしていた際、郷土愛に満ちた担当の係長が教えてくれてこの書の存在を知ったのですが、実際に手にしたのは本学に赴任してからですからつい最近のことです。英語版の方は、学部必修科目・地域環境学の「新潟の地域環境」の回で英文ミニレポート課題として出題してきましたが、この 4 年間、７００人近くの学生の中で日本語訳書を参照したレポートはなかった模様です。新年度から科目が廃止されたので、ここに明かしますが、実は本学の図書館にも東洋文庫版で 2 冊日本語版の蔵書があります。

全東洋街道(上･下)

藤原 新也　集英社文庫 153-A［文庫］各 1,050 円

私が大学院時代にＰＬＡＹＢＯＹ誌に連載され、その後文庫本化した、フォトエッセイスト・藤原新也の出世作です。まず書名がいいですね。そしてイスタンブールから高野山まで、微妙にエロティックな写真とスリリングな文章が、私を含め、当時多くの若者の東洋への好奇心を誘いました。旅は未知なるが故にアトラクティブなものだと思いますが、生まれた時からネット世代で、バーチャルな情報に囲まれて育った今の君たちに、本書がどのように受け止められるのか、是非訊いてみたいものです。

☸　人間生活学部　健康栄養学科　宮西　邦夫　☸

アフリカ　赤道編　スーダンからザイールまで

船尾　修　山と渓谷

アフリカ　南部編　南アフリカからコモロまで

船尾　修　山と渓谷

山に登り、川を下り、街をさまよった辺境縦断紀行 1200 日・・・未だ見ぬ世界の旅へ、臨場感を持ちながら・・・多くの現地の写真と共に旅ができる本、是非、愛読下さい。

☸　国際地域学部　国際地域学科　石川　伊織　☸

芭蕉紀行文集　付　嵯峨日記

松尾芭蕉　（中村俊定校注）　岩波書店（岩波文庫）

『おくのほそ道』は教科書にも出ていますが、ほかにも芭蕉はたくさんの紀行文を残しています。この人はとにかくよく歩くのです。幕府隠密ではといわれるのも無理もないくらいに、とにかく歩く。そして鋭く観察をします。『野ざらし紀行』冒頭の、富士川のほとりの捨て子の描写など、鬼気迫るものがあります。俳人はよく「吟行」という旅をします。俳句に詠むネタ探しの旅ですね。与謝野寛と晶子がやっていた大正時代の『明星』など、毎号毎号、巻頭はこういった吟行でものした詩や短歌で埋められています。ということは、毎回毎回同人を募って吟行に出ているわけです。ある程度は物見遊山でもあったでしょう。しかし、芭蕉の旅は難行苦行に近い、それこそ命がけの旅です。これはもう、吟行なんていう生易しいものではありません。『おくのほそ道』の一節ではないけれど、旅に生き、旅を住処とす、です。あるいは、マルクス・アウレリウス帝の言う「人生は旅にして、過客もまた仮の宿」でしょうか。ストア派の哲学者でありながらローマ帝国皇帝として外征に次ぐ外征を余儀なくされ、結局は異国の地で客死した男の「旅」と、芭蕉の旅が重なってきます。

東京遺産――保存から再生・活用へ――

森まゆみ　岩波書店（岩波新書　新赤 858）

東京駅丸の内駅舎の保存・復元工事が完成しました。日曜日には人通りもなかった東京駅丸の内口が、今では観光名所になっています。近くの三菱一号館も復元されました。建設当初のままお堀端に立っている重文のオフィスビル群もあります。しかし、駅前の東京中央郵便局は、名建築と言われながらも、お金儲けの大好きな政治家とお役人と財界人たちによって、ほとんど破壊といってもいいくらいにめちゃくちゃにされてしまいました。私たちには、街や景観や公共建造物が「歴史性を背負った遺産なのだ」という認識が薄すぎます。本書は東京駅の保存・復元の運動もした森さんが書かれたもので、示唆に富むエピソードが満載です。

エキゾチック・パリ案内

清岡智比古　平凡社（平凡社新書　661）

古くから、パリは亡命者の街でした。第二次大戦後は旧植民地から多くのアフリカ系、イスラム系の移民が流入しています。実はインターナショナルな、しかも東方的（＝エキゾチック）な街でもあります。数年前から、イエズス会が 17 世紀ごろから中国に送り込んだフランス人宣教師たちの報告書を調べる仕事をしているのですが、その過程でとんでもないものを見つけてしまいました。18 世紀の北京のカトリック教会で歌われいていた讃美歌を録音した CD です。ところで、これを演奏しているのが、パリの在フランス中国人教会の信者のみなさんなのです。それも、18 世紀に中国で中国語で中国音階で歌われていた、そのまま中国音楽というキリスト教讃美歌と、フランス人がフランスから持ち込んだ正統的なカトリック音楽が同居しているという CD でした。パリの中にアジアがあり、アフリカがあります。パリ＜フランス＜ヨーロッパ＜近代文明……という単純な図式で世界を見てはいけない、ということでしょう。パリ旅行にいくなら、本書をお供にどうぞ。

旅してみたい　日本の鉄道遺産

三宅俊彦　山川出版社

近代化をしたくても富国強兵を実現したくても、お金のなかった明治政府は、粗製乱造の鉄道を日本中に、さらには朝鮮半島や中国東北部に作り続けます。鉄道は勾配に弱いのは充分わかっているのに、お金がないから、急勾配・急カーブ、時にはスイッチバックやアプト式まで使って、とにかく鉄道を敷設する。お金をかけてちゃんと作れば、それ以後 100 年以上も運行・整備に苦労しなくてよかったはずなのに、それができませんでした。そうした場所が、今、絶景に撮影ポイントになっているのだから皮肉です。本書は、施設の種類や構造ごとに、全国の鉄道遺産を写真入りで紹介した本です。書名の頭についている通り、すぐにも「旅してみたい」と思ってしまう絶景が目白押しです。

センチメンタル・ジャーニー

ロレンス・スターン（松村達雄訳）　岩波書店（岩波文庫）

『センチメンタル・ジャーニー』といっても、ジャズのスタンダードナンバーでもなければ、大昔に流行した松本伊代さんの歌でもありません。18 世紀のイギリスに生きた、ロレンス・スターン(Laurence Sterne)という奇人の、小説風の旅行記（？　逆かもしれませんが……）です。スターンは、世紀の奇書ともいうべき『紳士トリストラム・シャンディー氏の生活と意見(The Life and Opinions of TRISTRAM SHANDY Gentleman)』なるとんでもない本を書いた人でもあります。何しろ、全巻の三分の二まで来ても、まだ、主人公のとリストラム・シャンディー氏が生まれていない（！）という代物。全体のストーリーも、したがって、脱線に次ぐ脱線がそもそも本筋みたいなお話です。一方こちらの『センチメンタル・ジャーニー(A Sentimental Journey Through France and Itary, by my Yorick)』(1768)は、なるほど旅行記なのだけれど、当時のイギリスのジェントルマンが一度はやってみることになっていた「グランド・ツアー(Grand Tour)」のパロディーになっているといってもいいでしょう。あるいは、本書より 50 年ほど古い、ダニエル・デフォー(Daniel Defoe)の『ロビンソン・クルーソー』と比較してもいいかもしれません。ヨーロッパ近代といいながら、18 世紀というのは何とも変な時代であったのだということを知るには、最適な書物かもしれません。時間旅行もできる旅の本です。

ウィーン――ある都市の物語――

池内紀　筑摩書房（ちくま文庫）

大学一年の時のこと。同じ講義を取っていた同級生が、「ドイツ語の池内先生のスッゴイ本を見つけた！」と駆け込んできたものだ。いつもさえない格好で講義に来るあの池内先生が！　というわけで、我々は大学図書館の中の「本学教員の著書」の棚に群がったのだった。それが、当時、美術出版社という書肆から『都市の詩学』のタイトルで出版されていた本書だった。あの人生に疲れたみたいな風貌の池内先生が、あんれまあ、すごいラブロマンス風なエッセイを書いていらっしゃる……恋に免疫のない大学一年生にはそう見えたものだが、今から読むと、19 世紀末の雰囲気を濃厚に残した 1970 年代のウィーンの詩情あふれる紹介であった。本書に書かれたようなウィーンはもう存在しない。何しろ、市内には地下鉄が走り、あらゆる芸術運動はすでに商品と化してしまった。商店を飾るのがクリムト風のタペストリーなのか、それとも、もともと街中がこういうデザインと意匠に満ち満ちていたので、それをクリムトが素直に描写しただけなのか、もう見分けはつかない。東方の多民族国家であったハプスブルク帝国の名残は、パリ同様の人種のるつぼの中に見られる。違うのは、集まる人々の多くが東欧・スラブの人たちだといったところだろうか。
賢い人は旅をするほど賢くなり、愚かな人は旅をするほど愚かになる……といったのはモンテーニュだ。池内先生は賢人だろうが、さて、私はどっちだろうか？

国際地域学部　国際地域学科　山田 佳子

遠い太鼓

村上春樹　講談社

あの『ノルウェイの森』を執筆した３年間にわたる海外生活を回想した長編エッセイです。『ノルウェイの森』はギリシアで書き始め、シシリーを経て、ローマで完成したそうですが、異国における日常生活で体験し、感じたことを小説の主人公とまったく同じ語り口で綴った本書を読んでいると、欧州の長旅の中で、狭い東京を舞台にした主人公のごく個人的な物語『ノルウェイの森』が誕生した理由がなんとなくわかるような気がしました。

村上春樹の著作として一般にはあまり知られていないかもしれませんが、実は氏の作品の人気上位にランクされている、小説よりも面白い作品です。私にとっては韓国で修士論文を書いていて緊張で眠れない晩、オンドル部屋に敷いた布団の上で少しずつ少しずつ大事に読んだ思い出の本です。

国際地域学部　国際地域学科　太田 正之

ハワイイ紀行完全版

池澤夏樹　新潮文庫

旅の楽しみの１つはその準備にあると思う．楽しみにしている遠足であれば，たとえ目的地が隣町の山であろうと，決められたわずかな金額のなかで買うおやつに迷うのですら楽しい．大いに旅の準備を楽しみたい．電車に乗ろうか，車で行こうか，途中の昼食はどこで何を食べようか，どんなカメラを持って行こうか，どんな音楽を聴いて行こうかなどなど．出発前に決めなければならないこと，しておくべきことはたくさんある．準備は旅を最大限に楽しむためのもの．大いに迷い，そして楽しみたい．旅はもうすでに始まっているのだから．

旅の準備で最も重要なものは目的地に関する情報を集めることでしょう．旅行社から出版されている色鮮やかなガイドブックはいかにも楽しそう．世界的にも有名なハワイのような観光地ではなおさらそうです．一刻も早くホノルル便に飛び乗り，ワイキキビーチで泳ぎたい，ダイヤモンドヘッドからの眺めを楽しみたい，という気にさせてくれます．残念ながら本書はそのようなガイドブックではありません．第１章は「淋しい島」．南国の楽園と称されるハワイからは想像できない始まり方です．著者の綿密な取材に基づく，ハワイについての詳細なレポートです．ガイドブックの情報に飽き足りない人，ハワイの歴史や文化に興味がある人にお薦めです．読了時の満足感はなかなかのものです．

人間生活学部　子ども学科　大桃　伸一

日本百名山

深田久弥　新潮文庫

日本は山国です。私は旅に出ると、よく山を眺めます。日本人の多くは昔から山を崇び、山に親しんできました。これまでに多くの人がどれぞれの基準で「日本百名山」を選んできましたが、深田久弥の「日本百名山」はこれまで圧倒的な支持を得ております。深田は長い年月をかけて、北海道から九州までの日本の多くの山々を登り、その 歴史や風格だけでなく、人々にどのように愛されてきたかなどの視点から日本の名峰百座を選びました。私は昨年までにその半数以上を登りましたが、ほとんどはずれはありませんでした。本書は、それぞれの山のすばらしさを短い文章であらわした名著であり、すぐれた文学作品でもあります。

日本百名山　登山ガイド上・中・下

山と渓谷社編　山と渓谷社

「山ガール」に代表されるように、大自然のなかで心身ともにリフレッシュする登山が今若者にも人気です。「でも、辛い思いをして登るのは苦手」という人も多いです。山は無理して登る必要はありません。楽しむことが大切です。そのためには、楽して感動できる山をおすすめします。「日本百名山」のなかには、比較的簡単に登れて大きな感動をあたえてくれる山が多くあります。そうした山を探すのに適している本書を推薦します。

☸　国際地域学部　国際地域学科　荒木　和華子　☸

希望は絶望のど真ん中に

むのたけじ　岩波新書（700円+税）

もし私がお金持ちだったら、みなさんの卒業のお祝いに、この本を１冊ずつプレゼントしたいです。この本には、１９１５年生まれの現役ジャーナリストむのたけじさんの人生という「旅」が描かれていますが、この本を読んだら、私たちの「旅程」が変わるかもしれない、と思います。頬をピシャリと叩かれるような厳しさと、雪を解かす陽射しのような温かさの両方を同時に感じることができるはずです。

あわせて、同じ著者の『詞集　たいまつ』（評論社）も、旅のお供におすすめです。こちらはたくさんのバージョンがあります。中身を一部紹介しますね。

「親の思い出のうちに、なにが一番つよく印象に残っているかと10人にたずねてみたら、9人が異口同音に「なぐられたときのこと」「ひどく叱られたときのこと」と答えた。私の場合もそうなのだ。叱った親を恨んでいるわけではない。あとあとまで印象に残るほど、そのとき親は本気になり真剣になっていたということなんですね。なにごとにつけ、本気なもの、真剣なものだけが痕跡を深くきざむ。」ｐ１１４

「知らないことはわかりようがない、それは無知ではない。わからなければならないことを知ろうとしない、それが無知だ。」ｐ１１５

「人をその思想ゆえに縛ることも殺すこともできる。しかし縛られるのは手足、絞られるのは頸部だ。思想は、どんな権力にも殺されない。圧迫を加えられると種子がはじけてちらばるように広がって、いっそう多くの人々の肉体に宿り、やがて千人の圧制者をほろぼし、無数の人民をはげます。」ｐ１７９『詞集　たいまつⅡ』

人間生活学部　子ども学科　石井　玲子

若き数学者のアメリカ

藤原正彦　新潮社

著者が 29 歳の時（1972 年）から約 3 年間、アメリカの様々な場所に滞在した時に感じた孤独感、疎外感、対抗意識、仲間意識などが語られている滞在記。最初のうちは、精神的重圧を解消するために、アメリカに対する優越感を身につけようと必死になり、滞在の中期には日本人という意識を忘れようしていた著者。その頃は、アメリカの中に完全に溶け込んだようで、実は人々と深い部分で共鳴することはない。滞在の終わりの方で、自分が日本人らしく自然に振る舞えるようになると、共鳴できる人が出てきた、と著者は語る。

私自身が米国に滞在中にも、自分が日本人であることを除去することにより、アメリカに溶け込もうとしている日本人に出会いましたが、それは客観的に見ると滑稽でした。自分が異なる文化に身を置いた時、習慣などで面白いと思うことは取り入れたいですが、いつまでも味噌汁の味は忘れたくない、と私も固く心に誓ったことがあります。短い旅であれ、長期の滞在であれ、いつも自然体でいたいですね。

ボクの音楽武者修行

小澤征爾　新潮社

以前も「どこでもドアのかぎ」で推薦したことがありますが、この本は若い人にぜひ読んでほしいと思う本です。「世界のオザワ」が世界的な指揮者になる前の 24 歳の時、「外国の音楽をやるためには、その音楽の生まれた土地、そこに住んでいる人間をじかに知りたい」という思いで日本を飛び出し、旅費にも苦労しながら、貨物船に乗ってヨーロッパへ上陸し、スクーターに乗りながら一人旅をした体験記。そこで、さまざまな人との偶然（必然）の出会いがあり、大きなコンクールにも受賞して、フランス、ドイツ、アメリカを渡り歩いて、世界のオーケストラを体験していく。

彼の才能はもちろん凄いですが、それ以上に彼の行動力が凄い。これを読むと、何だかじっとしていられない気持ちになり、20 代ではない 40 代の私でも、何か新しいことをしたい、どこかへ行きたい、と勇気が湧いてくる本です。

☸　国際地域学部　国際地域学科　黒田　俊郎　☸

その日東京駅五時二十五分発

西川美和　新潮社

この本が傑作かどうかよくわかりませんが（たぶんそうではないでしょう）、昨年読んだ（あまり読んではいませんが）小説では印象に残った一冊です。1945 年 8 月 15 日、軍を除隊になり、東海道線の始発で東京駅から広島駅まで帰路についた伯父の体験を映画監督で作家でもある姪が中編小説にまとめたものです。余白の多い物語なので、時折、書架から取り出しては、再読しています。よかったらどうぞ。

☸　国際地域学部　国際地域学科　水上　則子　☸

ぬくモリ雑貨いっぱいのロシアへ（旅のヒント BOOK）

花井景子　イカロス出版

カナカナのかわいいロシアに出会う旅

井岡美保　産業編集センター

どちらも「ロシアの雑貨」をテーマにしたかわいい本です。本の上で小旅行を楽しんでもいいですし、この本を片手にロシアへ出かけよう！ということになっても、役に立つと思います。「ぬくもり雑貨・・」のほうの前半は、ロシア語のアルファベット順に「かわいいもの」が並んでいる図鑑になっていて、単語の勉強にも役立ちそうです。

☸　国際地域学部　国際地域学科　澁谷義彦　☸

ガリバー旅行記

ジョナサン・スウィフト作　平井正穂訳　岩波文庫

カルチャー・ショックは外国など文化の異なった場所に行ったときに感じる混乱した精神状態であるが、これに罹（かか）った本人も気づきにくく、なかなか面倒なものである。軽症の場合はホーム・シック、重症の場合は神経症の原因ともなる。しかしながら、いやしくも留学をしようとする者はこの「心がひく風邪」を楽しむくらいの覚悟は必要であろう。異文化は単に物珍しいだけではなく、普段意識していない自文化を意識する眼を私たちに与えてくれる。私たちは昔から異文化への憧れをもってきた。現代のように交通が便利でない時代においては、人々は空想によって未知の国に旅をした。子ども達に人気のある『ガリバー旅行記』もそんな目的で書かれたのである。

アイルランドの風刺作家ジョナサン・スウィフト（１６６７－１７４５）は１７４２年にこの傑作を世に送り出した。海外旅行にあこがれる船医ガリバーが４度の航海において難破して漂着した四つの不思議な国の旅行記である。全体は４部からなり、最初の２部すなわち、小人の住むリリパット国旅行記と反対に巨人が住むブロブディングナッグ国だけが、特に子どもむけに毒を抜かれて多くの国で翻訳され有名になった。しかし、本来この小説は当時アイルランドを搾取していたイングランドを痛烈に風刺した小説であり、作品のいたるところに風刺が散りばめられている。

リリパッド国には、身長６インチ（約１５センチ）くらいの小人の王国がある。ガリバーは最初この国の王に大事にされるが、やがて廷臣たちの妬みを買い生命の危険を感じて、これまた小人の住む隣国に脱出する。しかし、ガリバーはリリパッド国滞在中にその国の異文化に感心するところがある。興味深い二つを挙げてみる。

（１） この国では詐欺の方が盗みよりも大きな犯罪だとされている。その罰として死刑になることもまれではない。一般人は用心すれば泥棒は防げるが、用心しても騙されてしまうのが詐欺だからである。しかし、商いにおいて信用取引はたえず行わねばならない。正直な商人がいつも馬鹿を見ないように罰を重くしてある。

（２）古代から正義の女神は剣と天秤を持っており、中には目隠しをした女神もある。これに対して、リリパッド国の正義の女神は、右手には口の紐（ひも）をゆるめた金の袋をもち、左手には鞘（さや）に入った剣を持っている。さらには、眼が６つついている。前に二つ、後ろに二つ、左右に一つずつある。この国では罰則だけを設けて法律を強制的に施行するといった無茶なことをせず、罰よりも褒美を与えることで法

律を守らせる。正義の女神の 6 つの眼は、裁判では四方八方に細心の注意を払うことが必要だということを示している。

リリパッド国のこのような異文化に遭遇すると、当たり前に思っている自文化の背後に国家権力のようなものが透けて見えるようになる。異文化に出会うことは極めて重要である。カルチャー・ショックを怖がらず楽しむ覚悟で旅立とう。